

## 銅賞

### 気持ちと行動

横須賀市立坂本中学校三年

眞鍋 亜実

ある日、社会の授業で人権、「人種差別」について習った。人を肌の色で差別し、肌が黒いアフリカ系アメリカ人を「黒人」と呼んだ。白人は優れていて黒人はあまり優れていないとされていたのだ。しかも黒人は奴隷とされ、各国で「奴隷売買」されていたのだ。奴隷は職業選択の自由はなく、雇い主を選ぶこともできない。また、婚姻や資産に関する権利は持たず、その子どもたちもまた奴隷としての身分を継承することになる。

これが同じ人間なのだろうか。いや、この時代だから、このような世界だから言えることかもしれない。しかしこれは決してあつてはならないのは事実だ。

ただ、これと似たようなことを幼い頃の私は経験したのだった。

私が小学校低学年の時。いつものように楽しい休み時間。美味しい給食。嫌だけどなにかと頑張った授業。友達とふざけあう日々：それが、普通だと思っていた。

けれどここから大きく自分が崩れていったのだった。

同じクラスのEくんは、若干ハーフということもありみんなと違っていた。アフリカ出身のお父さんがいるらしく、肌が黒かった。みんなはその子を「黒人」と呼んだ。誰一人として本当の名前で呼ぼうとはしなかった。もちろん私も…。

ある日、Eくんが座っているイスにはその姿はなく、先生は「今日Eくんは、お休みです。」と朝の会に言った。…なんだか心当たりがした。とつても重い罪悪感があった。しかしこの頃の私はとても弱く、あまり人前で発言をしない物静かな子だった。遊ぶ物を決めるのも、他の子がこれがいいと言えば、自分の意見はさておき、他の子がしたいことをして遊んでいた。いわゆる優柔不断だった。なにか心がざわついていたけれど、その気持ちは誰にも打ち開けず、自分の心の中にしまっていた。しかし次の日も次の日もEくんは学校に姿を見せなかった。

が、次の日Eくんは学校に来たのだ。Eくんの目はとてもおびえていた。何かから、逃げ出したいような、冷たく震える視線…。

Eくんが来たと思うとみんなは「よお、黒人！元氣だったか。」と小ばかにした発言を繰り返す。だんだんEくんの表情が歪んできていた。

私は自分の中で葛藤していた。このまま私が黙っていれば、Eくん以外のみんなには反発をうけない。しかしこのまま黙っていたら大切なクラスメートを一人失う気がした。自分の中では、善と悪では善を優先するも、なかなか行動に表せない。私は色々考えてしまい、手汗がすごかったのを覚えている。

だんだん、クラスみんなの声が大きくなり、「黒人、黒人、黒人：うるさい！！。」思わず叫んでしまった。やってしまったと思ってもう遅かった。みんなから鋭い視線を向けられたのは私だった。「お前、調子乗るなよ。覚えとけ。」そう言われて、私は間違ったことをしたと思った。

しかし次の日からEくんは「黒人」ではなく「Eくん」と呼ばれるようになった。そして、クラスの男子はEくんの面白さに気付いたのか、休み時間もEくんと遊ぶようになった。

これで終わればハッピーエンドなのだか、私の戦いはこれからだった。

一年生の頃から仲が良かった友達が、妙に私をさけているような気がした。一緒に下校していたのが急に他の子と帰るようになり、夕方よく遊んでいたのが、急に誘われなくなり、私は一人になって

しまった。

さらに、物はよくなり、机の近くにわざとらしくゴミが散乱し、下校時間になり帰ろうと思うと下駄箱に三か所死ねと油性ペーパーで書かれていた。これ以上に悲惨なことはあつたが、ここには書けない。これは誰にも言わなかった。けれど、私の異変に気付いた母が支えてくれた。私は思った。

きっとあの時黙っていれば……。誰からの殺意もかわず、友達も失わなかったのかもしれない。私は勇気を代償に、友達と生きる気力をなくしてしまった。私は、友達？に何も伝えず、その小学校を転校してしまった。

今思えば、あんなものは友達ではなく、私は自分を孤独から守る盾だったのかもしれない。私の行動は間違っていなかったのだ。

そして、この経験のおかげで私は強くなることができた。人を守るような強い人になれた。そして弱者が強者を偽り、強者が弱者を演じることのない強い生き方をしようと思う。きっと私は人からしくあるために持った広い道德観を輝かせるために過去を題材に人種差別について書いた。綺麗事かもしれないが、この感情が、今でも身にしみている。

これから先、どれくらい人を救えるだろう。